# 「摩耶」vs「島崎」

天草二

私の好きな推理作家に天城一という人がいます。昭和20年代は、摩耶という探偵が主人公の密室物が中心でした。天才型の摩耶が、島崎警部補と会話を進め、奇妙なロジックを振り回すうちにあっという間に事件を解決してしまいます。その後昭和50年代頃から摩耶の引き立て役であった島崎警部補を中心に据えたアリバイ物を書くようになりました。摩耶に比べれば、島崎は凡庸な警察官です。論理の奇抜さは失われ、読者は島崎と同じ視点で悩むことになります。どうして摩耶物から島崎物へ作風が変わったのでしょうか。それについては、作者自身が、「摩耶ものについて戸田氏のご意見に答えて」の中で次のように述べています。「摩耶ものは戦間期に見られた数学の一種の傾向についての郷愁に基づいて書かれています。摩耶ものに見られる「ペダン」は装飾ではなく本質でした。それだけに、戦後の時代になると数学はゆとりを失い奇妙な証明が数学から一掃されて、その結果自動的に摩耶ものを終結させてしまいました。」

この部分を私なりの視点でもう少し説明してみましょう。天城一は『DESTINY CAN WAIT』の中で、「学問の研究で一番神秘的と思われるのは、発見の一瞬でしょう。アルキメデスのエピソードが示しているように、その瞬間は戦慄的な感動を伴います。しかし、これを文学的に表現するのは至難で、ファウストの書斎の場で地霊と交わる場が僅かに片鱗を留めているといえましょうか。この困難に正面から取り組んだのは若気の過ち、第九章の苦戦が証するかと存じます。」つまり、探偵がその発見の一瞬を分かる、まさにその一瞬を描き出そうという試みをしています。ここでは、この「発見の一瞬」というキーワードを手がかりに天城の作風の変化を考えてみます。

そこで、次のような問いから始めます。「探偵が事件の全貌を知るまさにその時はいつか？」「一体どうような契機が彼に犯人像を、または事件の様々な謎を解決せしめたのか。」

例えば、「ポツダムの犯罪」全15ページでは、4ページ目の終わりごろに、「摩耶はまるで関心がない。摩耶は祭壇の上の怪しい品に心を奪われている。ひとつひとつ取り出しては、ためつすがめつながめ、異様な笑いを顔に浮かべる。」とあり、どう考えても、ここで摩耶は事件の全貌を知ったのではないかと思われます。もう一つ、例を挙げます。

「明日のための犯罪」全12ページ。これにいたっては、開始わずか10行で、「摩耶正は気のない肯き方をしてみせた。」とあり、このあたりで摩耶は真相を知ったとしか、考えられないわけです。

一体どのような天啓が摩耶に降りたのか？残念ながら私たちには想像さえつきません。後は、摩耶と島崎の会話に翻弄されるだけです。摩耶は天才型の探偵ですから、私たちには、探偵があっとわかった瞬間を共有することはできません。天才の考えることを凡人の私たちが想像することはできない相談です。そうすると、島崎物はその『問い』に答えを与え

ようとする作品だと理解できるのではないかと考えました。
その観点に立って、島崎物のいくつかの作品を見てみます。その天啓が訪れるまさにその一瞬がいつなのか。
「ヴァンパイア」では、電車の編成がトリックになっています。小説の最後に、島崎が問題の電車を目の前にして呆然としている姿が印象的です。まさにその瞬間です。島崎はトリックに気づき、私たちも気づきます。列車編成が変わっているその場面を見たら、わかるだろうと思われがちですが、上のような問いを課すことによって、作者の意図するところが透けて見えます。見たからといって、それに気づくとは限らない。『よく見る』ことによって発見の一瞬は訪れる。事件を再構成すること、あることと別のあることを結び付けること、一見異質な出来事の間に共通の視点を持つこと、それは、見ることが出発点だと指摘しているように思えます。その重要性の指摘と考えるのならば，これは摩耶物では語れません。摩耶は、事件の始まる前に，よく見て知っているのですから。私たちにとって，大切なのは『よく見る』というまさにその実際的な行為です。その経験が必要です。この作品は，まさにその一瞬を描いているのです。
次は、「春嵐」です。これは、人がわかるというそのスリリングな状況を非常に短い話の展開のなかで実にうまくまとめています。『他との対話』を通して，問題解決に至っています。でも、互いが議論をし、問題を整理することだけで、事件が解決するわけはありません。皆さんもわかるように、似たような者同士で考えても、新しい視点はそう出てきません。
「急行さんべ」では、その議論がとてもスリリングでしたが、当然ながら解決には至りません。刑事達がいろいろな議論を尽くし、さまざまな案を提出しますがことごとく外れ，結局、島崎の敗北で終わります。話し合うだけでは、新しい観点が出てくるとは限らないのです。何か、特別なことがないと、そこから先に進めないのです。似た者同士では，一度壁にぶつかると容易にはその壁を乗り越えることはできません。ディスカッションをする場合に大切なことは、異質な観点です。
「春嵐」の場合、島崎に対して、某大物外交官が登場します。警察官の考え方とまったく次元の違う人物です。従って、議論も、予想がつきません。それが、かえって島崎に事件の新しい見方をもたらせます。島崎が事件の全貌をわかるというまさにその一瞬を私たちも共有することになります。いろいろな考え方の人がいて、それが自由に話ができて、そうするとまったく想像もつかない、絶対実行不可能だと思えるようなことでも、可能になると、上の作品は暗に述べているように思います。摩耶は、独力で問題解決できるのであり，『対話』の必要はないわけですから，そのことのありがたみを伝えることはできません。摩耶にとっては，解いた答えをどのように島崎にプレゼンテーションするのかが，最大の関心事となっています。
したがって，「発見の一瞬」を描こうと思えば，摩耶物ではなく，私たちと同じ視点を持つ島崎物が必要になってきます。これで、摩耶物と島崎物の違いについて、少しは、説明ができたのではないかと思います。